

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★



Data

監督: 吳天明 (ウー・ティエンミン)
撮影: 陳万才 (チェン・ワンツァイ)、
張藝謀 (チャン・イーモウ)
出演: 張藝謀 (チャン・イーモウ)
／梁玉瑾 (リャン・ユイチン)
／呂麗萍 (リュイ・リーピン)
／解衍 (チェエン)

👁️👁️ みどころ

水の出ない山西省太行山脈の寒村で、何代にもわたって井戸掘りに執念を燃やす村民たち。水は人間が生きていくための命の源なのだ。1987年に西安映画製作所の「改革者」吳天明監督が、張藝謀を主演に据えてつくった2時間10分のこの大作は、ドラマティックで面白く、そして深く考えさせられるもの。果たして井戸は掘りあてられたのだろうか・・・？今でもこの映画の新鮮さは、バッチリ！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

〈西安映画製作所の「改革者」、吳天明監督〉

この『古井戸』が、3本目の監督作品となる吳天明監督は、1984年に『人生』を監督した後、中国内陸部の西安(昔の長安の都)にある西安映画製作所の所長に就任して、その大改革を行ない、「西部映画製作所」と言われるほど西安映画製作所を世界から注目される撮影所に生まれ変わらせた人物。その吳天明監督は、1982年に第1期生として北京電影学院を卒業した、陳凱歌、田壯壯、黃建新らの新世代の監督を次々と起用して作品を作らせた。そして、吳天明監督自身が1985年から1986年にかけて製作された中国映画に衝撃を受け、「彼らは功労者だ！希望だ！『黄色い大地』など一連の映画が出現したから中国映画は始動しはじめたのだ」「彼らを見殺しにしてはならない。彼らの道が漸たれれば中国映画は窒息してしまう！」と述べていたと『中国映画の明星』(石子順・平凡社・2003年)に書かれている(183ページ)。

〈主演は何と張藝謀〉

吳天明監督は、この『古井戸』では何と、張藝謀を主演に抜擢した。張藝謀は1984

年の『黄色い大地』、これに続く1985年の『大閩兵』で、陳凱歌監督の下で撮影を担当し、さらに1987年には初の監督作品となる『紅いコーリャン』の製作準備にかかっていたため、『大閩兵』の撮影を完了した1987年だけ手が空いていたというわけだ。『中国映画の明星』によると、「中国北方の農民の典型である主役を演じる男優が見つからなかった。撮影の張藝謀の風貌が農民の中の農民にぴったり、まさに主人公に適していることを呉監督が発見して、即座に主役に抜擢した。」そして、「張藝謀は北京電影学院では撮影科だったから、監督科学生のように演技実習は受けていない。演技の基礎などはまったく身につけていないのに、カメラの前ではベテラン俳優のように堂々としている。」と書かれている。もっとも「一番難儀したのはやはり、呂麗萍扮する妻とのベッド・シーンだった。これだけは監督のいうとおりにはできない。身体がこわばってしまうのだ。」と書かれており、何とも面白いエピソード。実際にスクリーンで観る張藝謀の演技は、たしかに堂々と落ち着いたもの。そして、決して多くはないセリフもきわめて自然。たいしたものだ。もっとも、張藝謀は1950年生まれで、1978年の北京電影学院への入学は1人だけ27歳だったから、同期生のなかでも彼だけが年長者。したがって、映画の中で「同級生」とされる恋仲(?)の趙巧英の可愛さと対比すると少し違和感があるのが難点(?)。なお、ベッドシーンといっても、あの時代、あの状況下でのものだから、「身体のこわばり」までは伝わってこず、格別の不自然さは見られない・・・?

<「大地」にこだわる中国人!>

アメリカ人宣教師の娘として中国で生まれ、17歳まで中国で育った、アメリカ人の女流作家パールバックが、1931年に発表した中国文学の最高峰、『大地』のテーマは、いうまでもなく中国農民の大地への執念。1984年以降、陳凱歌、張藝謀、田壮壮ら第5世代監督の手によって、突然生まれてきたニューウェーブが、1931年に発表したテーマは、やはり中国の土地。とりわけ張藝謀監督のそれは、中国西北部の貧しい農村をとりあげることが多かった。そして呉天明監督の、この『古井戸』も、舞台は山西省太行山脈の奥にある老井(ラオジン)と呼ばれる小さい村。ちなみにこの『老井』がこの映画の原題だ。

水のない土地で生活し、生きていくことが大変なことは当然。しかし、そんな貧しい村でも、ひたすらその土地にしがみつき、何百年も、何代にもわたって黙々と井戸を掘り続けてきた中国の農民の姿は、何とも感動的!こんな視点からも、この『古井戸』を観る必要があるだろう。

<「水争い」の深刻さは日本と同じ>

この映画では、1つの井戸の「使用权」をめぐる、2つの村が対立する姿が描かれる。既に今は枯れてしまった井戸だが、それでもその権利の帰属は村にとっては大問題。そこ

で、双方の村民が結集して、井戸の前で対峙。孫旺泉は井戸の使用権を記した「石銘」を示して説得しようとするが、所詮無理。村人が入り乱れての大乱闘となり、ケガ人が出る事態に。そして、この村同士の「出入り(?)」において、孫旺泉はとっさに井戸の中に飛び込んで、井戸が埋められるのを防いだため、一躍、村のヒーローに・・・。

<村のリーダーは誰?>

水の出ない村で、何とか井戸を掘りあてようと努力を続けているリーダーは村の支部書記。1992年のヴェネチア国際映画祭で金獅子賞と最優秀主演女優賞を獲得した、鞏俐(コン・リー)主演の第4作、『秋菊の物語』(92年)では、「村長さん」が登場して絶対的な権力者ぶりを見せるが、この映画では、そんな役割の村長さんは登場しない。「書記」は、中国共産党の役職だから、この時代の寒村部での村のリーダーは、事実上、中国共産党が握っていたのだろうと推測されるが・・・?

<モテモテ(?)の孫旺泉>

孫旺泉は、祖父と父と弟たちばかりの男世帯で生活しており、貧乏。孫旺泉たち兄弟が「嫁をとる」には金が必要だが、それがいないため嫁もとれない状態。しかし孫旺泉には中学校の同級生の趙巧英がいる。趙巧英はちょっと進歩的な思想を持っている様子で、2人の仲はいい感じ。旧式の結婚ではなく、新しい形式の結婚ができるのでは・・・と思わせるが・・・?

他方、子持ちの段喜鳳(呂麗萍)は、夫に先立たれ、今は母親と女だけの暮らし。そこで段喜鳳の母親はお金を払って孫旺泉を婿とりに。その金額は800元。これを聞いた孫旺泉は憤懣やるかたない。そんな動きの中、井戸掘りに執念を燃やしていた父親が「ハッパ」の事故で死亡。家庭の事情を優先せざるをえない孫旺泉は遂に、段喜鳳の家へ婿入りすることに……。それを外からじっと見つめている趙巧英。趙巧英も可愛いが、段喜鳳も市毛良枝に似た顔立ちで、結構美人。おっと、これは余談だが……。

いやいやながら、段喜鳳の家に入った孫旺泉は、自分の気持の整理ができないため、段喜鳳の隣に寝ていても、セックスレス状態。しかし、何日か後、段喜鳳が1人すすり泣いているのを見た孫旺泉は、やさしく段喜鳳を抱きよせて……。これらの難しい演技を張藝謀は難なくこなしている。このように、孫旺泉は結果的に「両手の花」状態で、モテモテとなる(?)が、そんな中、父の執念を受け継いで井戸掘りに執念を燃やすことに……。

<執念を燃やす孫旺泉たち>

党支部書記の応援を受けて、井戸掘りの技術を学んだ孫旺泉は、中学校を卒業して「学のある」趙巧英と党支部書記のぐうたら息子、孫旺才(解衍)と共に地質調査をやった上で、1つの場所を定め、井戸掘りに着手した。井戸掘りの苦労が、並大抵のものではない

ことはこの映画を観ているとホントによくわかる。その意味でもこの映画は一見の価値があるはず。それはともかく、ストーリー的に面白い(?)のは、地質調査を含めた、この一連の井戸掘り作業中で見せる孫旺泉と趙巧英との恋愛模様(?)。しかし、突如おこった落盤事故は、そんな悠長な気分を完全に打ち砕くもの。これによって孫旺才は即死。孫旺泉と趙巧英も救助は期待できず、地の底で死を迎えるだけの状況となった。そんな極限状態の中、2人のピュアな愛が燃え上がり、ここで2人は・・・? 1987年の中国映画とは思えないラブストーリーの名場面だ。

<井戸は掘りあてられるのか?>

趙巧英と共に、九死に一生を得て救助された孫旺泉は、趙巧英からの、「まだあの井戸を掘るの?」と言う質問に首を横に振ったものの、やはり執念は井戸掘りに……。先祖から何代にもわたって200年以上、井戸を掘り続けている孫旺泉たちにとって、そしてまた、これまで何の実績もあげられない支部書記にとって、「もし水が出なかったら……」と思いつつ、井戸掘りはやはり途中でやめることはできない大仕事だった。

上部からの支援も決まったが、まだ資金が足りない。そんな中、支部書記の呼びかけで集まった村民たちは、それぞれが寄付を……。今では心の底から孫旺泉を愛している段喜鳳も、自分の品物を売った。そして村を去る決心をした段喜鳳は、母親に託して自分の嫁入り道具を提供した。こんな孫旺泉を中心とした村民挙げての井戸掘りは、果たして報われるのだろうか……?

<2時間10分の大作>

この映画は2時間10分という、当時の映画としては長時間の大作。そして飽きさせることのない映画。しかし、その大作もいよいよラストに……。そのスクリーン上にあらわれるのは、石に刻まれた、200年以上にわたる井戸掘りの歴史を示す文字。その記録は、何回チャレンジしても水が出なかったということのくり返しというもの。そして、何回も何回も事故を起こし、多くの貴い人命を失ったことの記録。井戸掘りに執念を燃やした孫旺泉も、父親と同じくその作業中……。しかし、遂に、本当に遂に、1983年1月、この村でも井戸を掘りあてることができたということだ。

1987年という時代の中国映画ながら、井戸掘りをテーマとしたドラマティックな物語展開と、深く描かれた各人物の人間性、そして瑞々しく描かれた男女の恋愛模様は、今観ても十分面白い映画。これは本当におすすめ作品だ。

2004(平成16)年6月24日記